Kitakyushu City
Eco Tour Guide Book

北九州市
エコツアー
ガイドブック

SDGs 未来都市　北九州市

第1912068B号

自 然

青い海と青い空、清らかな川の流れ、緑豊かな山々。北九州市は工業・産業都市でありながら、豊かな自然環境にも恵まれた美しいまちです。ここには、希少生物の宝庫・曽根干潟や、日本屈指のカルスト台地・平尾台など、誇るべき自然がたくさんあります。都市と見事に共生し、融合する北九州市の大自然をご紹介します。

Nature

■ エコロジーと生命の大舞台　曽根干潟　4−5
■ 地球の進化が生んだ驚異の大地　平尾台　6−7
■ 奇跡の自然再生力と市民の熱い思いがもたらした
生き物たちの楽園　北九州市響灘ビオトープ　8−9
■ 関門海峡・若松北海岸・山田緑地・皿倉山　10−11

環境産業

かつて深刻な公害問題を克服した北九州市は、持続可能な循環型社会の実現に向け、いち早く模索を続けてきました。目指したのは、「環境産業」の構築。志を支えたのは、ものづくりのまちとして培った技術と熱い思い。ここでは、北九州工コタウンをはじめ、未来を拓く先進技術についてご紹介します。

Environmental industry

■ 未来を創るエコロジーアイランド
北九州エコタウン　12−13
■ 北九州エコタウン響灘地区　14−17
■ エネルギーのことは響灘地区で学ぶ
北九州次世代エネルギーパーク　18−19

まちづくり

21世紀、一つしかないわたしたちの美しい地球を守るため、日本が、そして世界が、低炭素社会を目指して動きはじめています。産業とまちと自然が調和した環境共生のまちづくりは、新しい価値観をつくり出すとともに、人の絆を深め、心豊かで住みやすいまちをつくります。明日の低炭素社会を拓く、環境共生のまちづくりをご紹介します。

town planning

■ 自然・環境・文化の共存するまち　八幡東田　20−21
■ 創る・育む 新しいまち みんなの未来区
BONJONO　22−23
■ にぎわいを環境で創る
小倉都心部・黒崎副都心　24−25

活 動

北九州市の誇る自然・未来を拓く先進技術・環境共生のまちづくり、それらを支えるのは、そこに住み、働く人々の力です。市民・企業・行政、それぞれの力が結集し、わたしたちの住むまち、そして未来を形づくっているのです。北九州市を支える、人々の活動についてご紹介します。

Activity

■ 貴重な環境を次の世代へ 日本カブトガニを守る会 福岡支部　26
■ 大自然の魅力を多くの人に 平尾台ボランティアガイド　26
■ 行動変容を北九州から世界へ 北九州市エコタウンセンター　26
■ 大海原の新動力の実現へ 九電みらいエナジー㈱　27
■ いつまでも住み続けたいまち ボン・ジョーノ 住民コミュニティ部会　27
■ 新しい形のごみ拾いボランティア グリーンバード北九州チーム　27

Kitakyushu City Eco Tour Guide Book

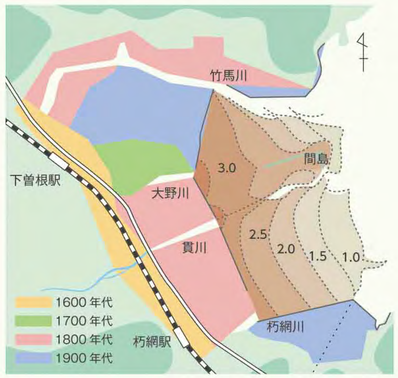
■ まち全体が学びのフィールド
北九州エコマップ　28−29

エコロジーと生命の大舞台
曽根干潟

かつての海底から歴史を眺望

曽根干潟は、北九州市の東部、小倉南区曽根新田の海岸部にあります。面積は517haで、周辺には農地や産業用地が広がっています。一帯では、江戸時代から干拓が進められ、田園地帯が造成されてきました。最初の干拓工事は、寛永の頃（1624～43）、細川忠興の命によって行われたことが記録に残っています。それから昭和の頃に至るまで、現在の干潟より広い約585haが干拓されました。つまり、それ以前の曽根干潟は、海が今よりもかなり内陸に入り組んでいたのです。曽根干潟には4本の河川が流れ込み、1年間に約7,000万㎥の淡水と3,300tの土砂が運ばれています。このことも干潟の形成になくてはならない要因の一つです。昔から格好の漁場であった曽根干潟一体では、現在もカキの養殖や、刺し網、定置網漁などが営まれています。

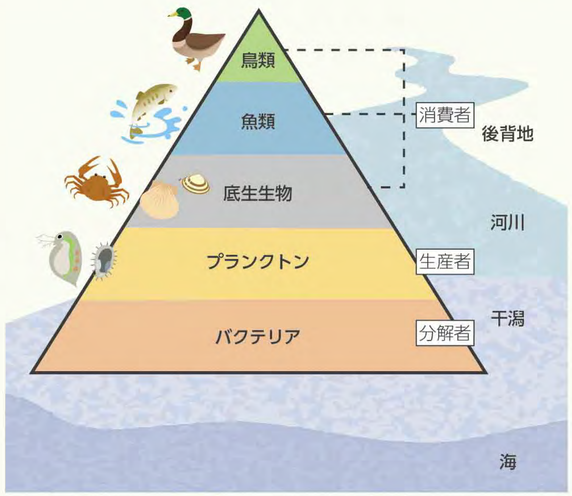
また、曽根干潟には、ズグロカモメやシマヘナタリ、カブトガニといった希少な生物たちが生息しており、平成13（2001）年に環境省が指定する重要湿地の1つに選定されました。



◆曽根干拓の変遷と干潟地形

循環のドラマ「食物連鎖」の中で生きる
干潟と生き物

干潟は、「天然の浄化槽」と呼ばれています。海洋環境の中でも、物質の循環がもっとも盛んで、生き物それぞれの役割（活動）のおかげで、干潟は浄化され、安定した姿を保っています。



干潟では、川から流れ込む豊富な栄養分によってプランクトンが繁殖しています。このプランクトンを底生生物（ゴカイ類、貝類、カニ類）が、さらに、これらのプランクトンや底生生物を魚や鳥が餌として利用しています。

このように、干潟では生物の食う食われるという食物連鎖の流れの中で、栄養分が生物へと姿を変え、捕獲や移動によって干潟の外に出ていきます。こうすることで、干潟は常に良好な環境を保つことができるのです。

絶滅危惧種や 希少種が勢ぞろい
曽根干潟のいきものたち

写真提供：日本野鳥の会北九州支部　NPO 法人定量評価研究会　日本カブトガニを守る会福岡支部

野鳥

曽根干潟は、全国でも有数の越冬地で、春・秋・冬を中心に、カモ類、シギ類、カモメ類などこれまで100種類以上が確認されています。

ズグロカモメ
黒く短いくちばしと暗赤色の足が特徴です。夏に中国沿岸で繁殖し、冬に日本や台湾、ベトナムに渡って越冬します。曽根干潟は日本有数の越冬地で約300羽が越冬します。

ダイシャクシギ
大型のシギで、下向きに大きく曲がったくちばしと腹や腰が白いのが特徴です。曽根干潟では冬鳥として12～3月に約80羽が越冬します。

ホウロクシギ
大型のシギで、ユーラシア大陸東北部で繁殖し、オーストラリアで越冬します。曽根干潟には3～5月と8～11月頃に訪れます。

マガモ
雄は頭が緑色でくちばしが黄色、メスは全体が褐色でくちばしが黒色です。曽根干潟では10～5月に200羽以上が越冬します。

クロツラヘラサギ
トキ科で東アジアに生息する重要種です。曽根干潟には毎年20羽以上飛来しており、重要な越冬地として注目されています。

ツクシガモ
白っぽく見える大型カモ類です。黒赤茶白と鮮やかな色彩でよく目立ちます。ユーラシア大陸の温帯で繁殖し、曽根干潟では約300羽が越冬します。

ハマシギ
冬鳥または旅鳥として浅い場所や河口に渡来します。数百羽以上の大群で飛び回ることもあり、干潟で忙しく動き回り、ゴカイや小さなカニなどをエサにします。

ヒドリガモ
雄は頭がオレンジ色で頭頂部がクリーム色であることが特徴です。海藻を好む草食性で、曽根干潟には約100羽が飛来します。

ミサゴ
翼は細長くて尾が短く、頭は白く背面は暗褐色の大型のタカです。曽根干潟では年間を通して見られますが、冬に多くみられます。

底生動物・魚類

曽根干潟では、年間を通じて300種類以上の底生生物が確認されています。数は多くはありませんが、アサリやシオフキガイなどの二枚貝も見られます。

シオフキガイ
比較的砂の多い場所に生息する二枚貝です。色は白く、全体にふっくらと丸みのある形をしており、鳥やカブトガニなどの餌になります。

シマヘナタリ
河口付近のヨシ原に生息しています。落ち葉や石の隙間で見られます。ヨシなどの茎に登るものもいます。

ハクセンシオマネキ
砂質干潟に群れで生息します。曽根干潟では河口の砂洲周辺に多く見られ、繁殖期に白いハサミを大きく振ります。

コメツキガニ
砂浜に生息する小さなカニです。巣穴の周りに砂団子を作ります。生息している場所の砂の色に合わせて体色が異なります。

ヤマトオサガニ
曽根干潟の代表種です。水分の多い軟泥質の環境を好み、夏の繁殖期にはオスが両手を振り上げるダンスをします。

トビハゼ
泥上や水面を飛び跳ねて移動します。曽根干潟の河口付近で、干潮時にはエサをとり、満潮時には石の上などで休みます。

恐竜時代の DNA「生きた化石」
カブトガニ

カブトガニは、約2億年前から姿・形がほとんど変わらないため、「生きた化石」と言われています。カニやエビの仲間よりも、クモやサソリに近い種類で、世界に4種類います。この古代生物が、恐竜の絶滅以後も強じんな生命力で21世紀まで生き抜いているのは驚きですが、実は条件の整った場所でしか生きられません。国内で生息が確認されている地域では、ここ数十年の間に急激に減少し、絶滅の恐れのある生物（絶滅危惧I類）となっています。曽根干潟は、そのカブトガニの国内屈指の産卵・生息地。カブトガニがいるということは、曽根干潟が豊かな環境の「海のゆりかご」である証です。

カブトガニの生活史

河口付近の砂浜　産卵・ふ化する場所

毎年6～8月の大潮時、つがいが朽網川や貫川等の河口付近の砂浜へ産卵にやってきます。

沖合　成体の生息する場所

干潟の中で脱皮を繰り返し、10年以上かけて成体になり、やがて沖合で暮らすようになります。1回の脱皮で約1.3倍大きくなります。メスはオスよりも1回多く脱皮するため、体が一回り大きくなります。

干潟・アマモ場
幼体の生息する場所

卵がかえると、「幼体」となり、砂浜よりも泥の多い少し沖寄りに生活の場を移します。

地球の進化が生んだ驚異の大地
平尾台

地上も地下も、360度の超常空間

平尾台は、南北約6km、東西約2kmにわたるカルスト台地です。標高は、約350～600m。国の天然記念物、北九州国定公園に指定されており、白い石灰岩が点々と浮き上がった独特の光景が人々を魅了し、圧倒します。この大地には、四季折々に咲く貴重な植物たちも根付いています。また、地下には大小200もの鍾乳洞があり、芸術的な別世界を見せてくれます。

市民の団結が、荒れ放題だったカルストを再生させた

昭和40年代半ばから、平尾台は国定公園や天然記念物であるにもかかわらず、大量のオフロードバイクが草原を荒らし、貴重な植物が盗難され、鍾乳洞までごみの巣くつになるなど、危機的状況にありました。しかし、立ち上がった市民団体や行政の対応により、今では美しい姿を取り戻しました。

▲昭和 40 年代、車両によって刻まれたわだち。

▲保護活動によってよみがえりつつある草原。

咲き、飛び、たわむれる 輝く命の桃源郷

平尾台の草原は、まさに都心の桃源郷。希少な草花、天空を優美に舞う野鳥、昆虫たちの愛らしい姿を見ることができます。

野鳥 bird

ホオアカ
4月から5月に飛来。平尾台ではホオジロもほぼ一年中見ることができます。

カッコウ
5月ごろ飛来。胸部から腹面にかけての白い羽毛に、黒い横しまが特徴。

キジ
日本の国鳥。ちなみに国鳥が狩猟対象となっているのは世界で日本だけだとか。

ウグイス
福岡県の県鳥。平尾台のドリーネの茂みで2月下旬から声が聞かれます。

昆虫 insect

カブトムシ
昆虫の王様。夏の夕暮れから夜半にかけクヌギなどの樹液に集まります。

ムカシトンボ
渓流に生息。日本の固有種で、原始的な生態をもつ「生きた化石」です。

ヤマトタマムシ
七色に輝く鮮やかな体。法隆寺の国宝「玉虫の厨子」でも有名。

アサギマダラ
日本昆虫学会が国蝶候補に選んだこともある蝶。品格のある姿が印象的です。

花 flower

ノヒメユリ
平尾台を代表する夏の花で、情熱的な朱色が人々の目を引きつけます。

ヒメヒゴタイ
絶滅危惧Ⅱ類。香りが良く、桜貝を集めたような可憐なつぼみをつけます。

シマカンギク
秋の平尾台を彩る花。今日、広く栽培されているキクの先祖にあたります。

サルトリイバラ
その名の通り、猿が引っかかってしまうほどの鋭いとげが特徴です。

地底のミステリーワールドへ。

ようこそ

平尾台の足元には、数億年の年輪を経た地球の静脈が今も脈々と流れています。
200もの神秘的な洞くつ世界。
ここでは気軽に探検できる3つの観光洞を紹介しましょう。

地球の胎内を思わせる水の迷宮 千仏鍾乳洞 SENBUTSU shonyudou

全長約 1,200m の横穴タイプの洞くつで、国指定天然記念物。高低差の大きい天井が曲がりくねって続き、水流による侵食がいたるところに見られます。足下に流れる水の感触を味わいながら、地球の胎内を巡るような神秘的な旅を堪能できます。

平尾台最長。20mの滝さえ抱き込む 目白洞 MEJIRO dou

平尾台最長の鍾乳洞は、昭和44年に学習院大学探検部によって発見されました。全長は約1,800m。水の溶食が創り出したカーテン状の鍾乳石などが見られ、非公開ながら、洞くつの奥深くには巨大なホールや、落差20mの滝も確認されています。

幻想的な造形が魅了する竪穴洞くつ 牡鹿洞 OJIKA dou

ドリーネの底が陥没してできた、国内でも珍しい竪穴タイプの洞くつです。長さ403m、高低差48m。洞口に架けられた階段を下ると、さらに横穴が続きます。ニホンカワウソ、ムカシニホンジカ、ナウマンゾウなどの化石が発見されています。

奇跡の自然再生力と市民の熱い思いがもたらした生き物たちの楽園

北九州市響灘ビオトープ

約30年をかけて廃棄物処分場に生まれた日本最大級のビオトープ

生命の「bio」と場所を表す「topos」を合成した言葉で、生物の生息空間を意味する「ビオトープ」。若松区響灘地区には、敷地面積41ヘクタールの日本最大級のビオトープがあります。

廃棄物処分場として埋め立てられたこの場所は、昭和55（1980）年からおよそ30年の年月を経て、湿地や淡水池、草原などの多様な環境が生み出され、そこに希少な生物を含む多くの生き物が生息するようになりました。

響灘地区に誕生したこの“奇跡の楽園”は、産業用地としての活用が期待されていましたが、貴重な自然環境を保全したいという多くの市民から寄せられた要望を受け、検討を重ねた末、生き物たちの棲む環境を守りながら廃棄物の覆土を行い、平成24（2012）年10月に「北九州市響灘ビオトープ」としてオープンしました。

ビオトープの魅力が詰まった自然環境学習の拠点「ネイチャーセンター」

ビオトープの敷地内にあるネイチャーセンターは、ビオトープの成り立ちや生息する生き物をパネルなどで紹介するとともに、自然環境の保全に取り組む市民・NPO等の活動拠点としても活用されています。

ネイチャーセンターでビオトープの見どころを学習した後は、ビオトープを熟知したスタッフによるガイドツアーも人気です。案内を聞きながら園内を散策することで、ビオトープはもちろん、生物多様性、自然と人間社会との繋がりなども理解を深めることが出来ます。

ビオトープスタッフによるガイドツアー

500種以上の動植物が生息する「生物の生息空間」

ビオトープではこれまでに、237種にも及ぶ鳥類、24種のトンボ、284種の植物などが確認されています。その中には、環境省から絶滅危惧種に指定されている希少な生物が多くあります。

整備された2kmほどの遊歩道では、四季折々の発見を楽しむことができ、生き物たちの生態系に触れ合える貴重な体験スポットです。

水辺の生き物たちにそっと近づいてみよう

湿地
観察デッキ、野鳥観察施設から水辺をのぞいてみてください。ここには、コガタノゲンゴロウなどの水生昆虫やメダカが生息しています。ヨシなどが繁茂する池には時折、水鳥が現れます。驚かさないように、そっと見てみましょう。

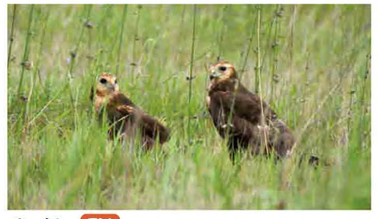
見晴らし台からビオトープ全体を見渡そう

見晴らし台
周辺より5mほど高く、ビオトープ全体を見渡せます。保護区域にあるミサゴポールや、コアジサシの営巣場所として整備された砂礫地が観察出来ます。
ミサゴ：タカ目ミサゴ科の留鳥、
コアジサシ：チドリ目カモメ科の夏鳥、絶滅危惧Ⅱ類

ミサゴポール
ミサゴの営巣を促すため、高さ7mの柱の先端に直径2mの籠状の架台を設置。

砂礫地
コアジサシの営巣を促すため、約1haの土地に礫層・砂層を設け、表面に貝殻を散布。

響灘ビオトープで見ることのできる生き物たち（環境省第4次レッドリスト等参照）



チュウヒ EN

ミサゴ NT

ベッコウトンボ CR

カヤネズミ 県(VU)

トノサマガエル NT

ミゾコウジュ NT

写真提供：岩本光徳氏

鳥類 サンカノゴイ（EN）
セイタカシギ（VU）
ツバメチドリ（VU）
ハヤブサ（VU）
コミミズク 県（VU）
オオヨシキリ 県（NT）
藻類 シャジクモ（VU）
植物 ツツイトモ（VU）
イヌタヌキモ（NT）
カワヂシャ（NT）
魚類 ミナミメダカ（VU）
昆虫 コガタノゲンゴロウ（VU）
コオイムシ（NT）
アオヤンマ（NT）

環境省絶滅危惧種カテゴリー

CR+EN	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅の危機に瀕している種
CR	絶滅危惧ⅠA類	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
EN	絶滅危惧ⅠB類	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
VU	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅の危険が増大している種
NT	準絶滅危惧	現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

人々の歴史を見つめてきたドラマ海峡
関門海峡

九州と本州を隔てる雄大な海峡で、国内外の大型貨物船など一日約500隻の船が行き交います。瀬戸内海国立公園に属し、全長は約28㎞。海峡の一番狭い所は早鞆瀬戸と呼ばれ、幅が650mしかなく、関門橋や歩いて渡れる海底トンネルで繋がっています。急流で知られており、壇ノ浦の合戦や武蔵と小次郎の巌流島の決闘など、度々歴史の舞台となってきました。門司港にある「関門海峡ミュージアム」では、インタラクティブ体験などにより関門海峡を楽しく学ぶことができます。

大正ロマン漂う　門司港レトロ地区

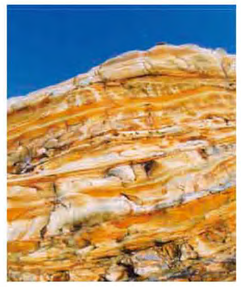
九州の最北端に位置し、関門海峡を臨む門司港は、古くから陸海交通の要所として栄えました。明治から昭和初期には、横浜港・神戸港と並ぶ国際貿易港として繁栄し、現在では歴史的建造物が建ち並ぶ、異国情緒あふれる「門司港レトロ地区」として全国有数の観光地となっています。代表する建物の一つである「門司港駅」は、約6年半の保存修理工事を経て、平成31（2019）年に大正3（1914）年の創建当時の姿に復元されました。

波の浸食が生んだ北九州随一の海岸美
若松北海岸

若松区の北部につらなる海岸線は、玄海国定公園に属する白砂青松の景勝地で、ウミガメの産卵も報告されています。4500万年～2500万年前、一帯には浅い海や亜熱帯性の大森林が広がっていました。今でもこの海岸を歩くと、そのころの樹木の化石である珪化木を拾うことができます。海岸線には当時の地層が露出し、波に浸食されて、大小の奇岩、洞くつ、貝の化石層など、さまざまな芸術的景観をつくりだしています。

遠見ヶ鼻

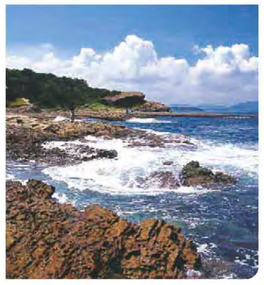
風化によって描かれた砂岩のしま模様がみごとで、地殻変動の跡も鮮明に見られます。潮がひくと、鬼の洗濯岩のような浸食地形が現れます。ここから発見されたヒゲクジラの先祖の全身骨格は、クジラ類の進化を示す重要な学術標本で、現在「北九州市立いのちのたび博物館」に展示されています。



千畳敷

干潮時には、長さ200m、幅50mにわたって貝殻の化石を含む板状砂岩が露呈し、巨大な海の大広間が出現します。これは響灘の荒海に浸食されて平らな岩盤になったもので、岩畳からはカイギュウ類（ジュゴンの先祖）の化石が見つかっています。

（写真は千畳敷付近）



30 世紀の森を育む都心の中の大森林
山田緑地

小倉北区の南西部にある山田緑地は、およそ約140haにもおよぶ広域公園。第二次世界大戦から戦後にかけて日本軍、米軍により弾薬庫として使用され、約半世紀にわたって一般の人々の立ち入りが制限されてきた歴史をもちます。そのため、都心の中にありながら宅地開発などから免れ、自然植生である照葉樹の森林が残っているたいへん貴重なエリアです。四季を彩る植物は600種以上、昆虫は1400種以上、鳥類は100種以上が確認されており、このほか両生・は虫類など多くの生き物がこの森の中で暮らしています。

1000 年後に伝える「30 世紀の森づくり」

北九州市では、この森を守り、育て、学びながら、遠い未来の人々に自然保護の大切さを伝えるため「30世紀の森づくり」を進めています。そのため、自然とふれあい、観察ができる「利用区域」と、環境保護を優先する「保全区域」「保護区域」に区分して公園を整備しました。この公園は自然環境学習施設として位置づけられており、小中学校の教育の場として広く活用されています。また、豊かな自然は多くの市民に親しまれ、年間6万人の入場者があります。野鳥や自然の草花も多く、市内における格好の観察の場ともなっています。

いにしえの伝説を秘めたふるさとの山
皿倉山

八幡東区にある皿倉山は、北九州市を代表する標高622mの山です。その名は、神功皇后伝説に由来すると言われ、北九州国定公園の一部となっています。市街地のすぐそばにありながら自然環境に恵まれ、多くの動植物や昆虫、野鳥などが生息しています。いくつもの登山ルートがあり、中腹にあるビジターセンターは、登山者の憩いの場となっています。また、ケーブルカー・スロープカーを乗り継ぐと、ふもとから約10分で山頂に到達できることから、国内外から多くの観光客も訪れています。

「皿倉八景」

「皿倉八景」は、市民投票で選ばれた景勝スポットです。神秘的な雰囲気の「巨樹老木・皇后杉」や、紅葉が色鮮やかな「楓杉峡」など8箇所あり、自然と眺望に恵まれた皿倉山の魅力が堪能できます。

山頂からの眺望

山頂からの眺望は、昼は市街地や周囲の山系が見渡せる「360度の大パノラマ」として、夜は日本新三大夜景都市である北九州市を代表する「100億ドルの夜景」として、昼夜問わず訪れる方を楽しませてくれます。

未来を創るエコロジーアイランド 北九州エコタウン

理想の循環型社会の実現に向けて エコタウン事業

エコタウン事業は、あらゆる産業から出る全ての廃棄物を新たに他の分野の原料として活用し、廃棄物をゼロにすることを目指す「ゼロ・エミッション」の実現を目指し、循環型社会の構築を図る取り組みです。平成9(1997)年、北九州市は、川崎市、飯田市、岐阜県とともに、当時の通商産業省より、「エコタウンプラン」国内第1号の承認を受け、「北九州エコタウン事業」を推進することとなりました。

「ものづくりで培った技術力」「公害からの奇跡の環境再生」「広大な響灘埋め立て地」
全てが揃ったとき、一大プロジェクトが動き出す

環境産業に連なるものづくりの歴史

明治34(1901)年、官営八幡製鐵所の操業とともに日本の近代産業は産声を上げました。これ以降、北九州地域は、日本四大工業地帯の一つとして、日本の近代化と高度経済成長をけん引する力となりました。北九州市には、1世紀以上にわたる産業技術の集積があり、やがてそれは、北九州市の環境産業を推進する原動力となったのです。しかし、その繁栄の影で、北九州市は、深刻な公害に苦しむことにもなりました。

▲昭和初年頃の八幡製鐵所東田溶鉱炉群

世界が認めた奇跡の環境再生

官営八幡製鐵所の繁栄と共に、深刻な公害に苦しんだ北九州市ですが、市民・企業・行政の協力により、美しい環境を取り戻しました。
平成4(1992)年、ブラジルで開かれた地球サミットで、北九州市は世界で初めて、国連地方自治体表彰を受賞。美しい環境を取り戻したことが、世界の模範とされたのです。この地球サミットへの出席が、エコタウン事業をはじめとする循環型社会づくりへの一歩を踏み出すきっかけとなったのです。

▲国連地方自治体表彰の受賞風景。

響灘埋立地 眠れる無限の可能性

響灘地区は、工場廃棄物などの処分場等として1世紀にわたって築かれてきた広大な埋立地でした。平成元(1989)年、響灘埋立地の有効利用について産学官からなる研究会が発足。その中で浮上したのが、この地を舞台に、新たな産業を展開できないかというものでした。産学官民が勉強と研究を重ね、道筋がみえてきたころ、当時の通産省が「エコタウン構想」を打ち出したのです。北九州市には、その構想を受け入れる十分な準備がありました。こうして、響灘埋立地を舞台にした、エコタウンプロジェクトが加速を始めるのです。

▲昭和50年。着々と進む埋立工事。

海を次世代のステージにした夢のプロジェクト
北九州エコタウン誕生

平成9(1997)年、北九州市は3都市とともに、通産省からエコタウンプラン全国第1号の承認を受けます。そして、誰もの創造を上回るスピードで事業が具体化していきます。

産官連携による、迅速な基盤整備

エコタウン構想が持ち上がったころの響灘地区は荒地のままで、道路は狭く、下水もないという状況でした。どうやって整備するか、それが大きな問題でした。そこで北九州市は、土地を所有する大手企業に基盤整備をゆだねようと考えました。市が整備していたのでは時間や手間がかかりすぎるからです。企業の担当者にもプロジェクトを成功させたいという志があり、思いは一致。大企業の組織力によって迅速に基盤整備が進められました。その後、整備された土地の一部は市が買い取り、中小企業に貸与するなどして環境産業の振興を図っていきました。

活気づく北九州市

「環境産業都市」へ始動

研究・実証・生産の拠点に

資源と市場の確保が課題

始動当時の記事▶
(イメージ図などは現在と異なる)。
(平成9年7月1日 西日本新聞)

大プロジェクト始動、初の事業化

エコタウン構想の承認を受けて、にわかに動き出した北九州エコタウン事業。平成10(1998)年4月には、廃棄物の最終処分をテーマにした福岡大学の研究所が開所します。リサイクル事業では、ペットボトルのリサイクル工場が同年7月にオープン。これは響灘地区のみならず、全国のエコタウンでも最初の事業化でした。国の動きに先駆け、平成元(1989)年から研究会を重ねてきたという下敷きがあったからこそ、エコタウンプラン第1号承認からわずか1年で事業化を実現させることができたのです。

▲誕生当時(平成10年)のエコタウン。

理想のゼロ・エミッション実現に向けて

北九州エコタウン事業には、大きなテーマがありました。廃棄物を出さないシステムづくり"ゼロ・エミッション"です。廃棄物をリサイクル工場で資源化する。そして工場から出る残りの廃棄物でエネルギーをつくる。さらにそのエネルギーを工場に供給する。次代のモデルとなるべく、理想的な資源循環の仕組みづくりが目指されました。

北九州エコタウンの成功のカギ
ガラス張りの情報公開

北九州エコタウンでは、情報公開が徹底されました。どんなに優れた研究や産業も、市民の理解を得られなければ独善的になりかねません。そこで、すべての施設を「見学可能」にすることで、開かれたエリアになることを目指したのです。こうして得た市民の信頼が、事業のスムーズな推進をもたらしました。

循環型社会を目指した、総合的な事業展開
北九州方式3点セット

北九州エコタウンでは、近接する北九州学術研究都市との連携により、環境分野の「教育・基礎研究」から「技術開発・実証研究」、「事業化」に至るまで総合的に事業を展開しています。これが「北九州方式3点セット」です。

基礎研究から技術開発・実証研究、事業化に至るまでの総合的展開

教育・基礎研究	技術・実証研究	事業化
●環境政策理念の確立 ●基礎研究・人材育成 ●産学連携拠点	●実証研究支援 ●地元企業のインキュベート	●リサイクル事業・環境ビジネス展開 ●中小・ベンチャー事業の支援

北九州エコタウン

北九州市全域に広がるエコタウン事業。その中核である響灘地区には研究機関や環境産業が集積し、次代を開く新しいアイデアや技術が日々生み出されています。北九州エコタウン。そこはまさに、未来を創るエコ・アイランドです。

響灘地区

風力発電

北九州市
エコタウンセンター

Kitakyushu
ECO
TOWN
MAP

大迫力の資源再生ゾーン
「総合環境コンビナート」

リサイクルの中核を担うエリア。自動車やペットボトル、家電、OA機器などの、迫力あるリサイクル工程も見学できます。

明日を開く
ベンチャーゾーン
「響リサイクル団地」

中小企業の環境分野への進出を支援。廃食用油を軽油代替燃料として再利用するなど、多彩な事業が展開されています。

▲ 廃棄物受け入れの海の窓口
リサイクルボート。

資源化の海の窓口
「リサイクルポート」

循環資源の荷役に対応した公共岸壁。陸揚げされた循環資源は、リサイクル工場に運ばれ、リサイクル製品やエネルギーとして生まれ変わります。

最先端の
環境技術開発
「実証研究エリア」

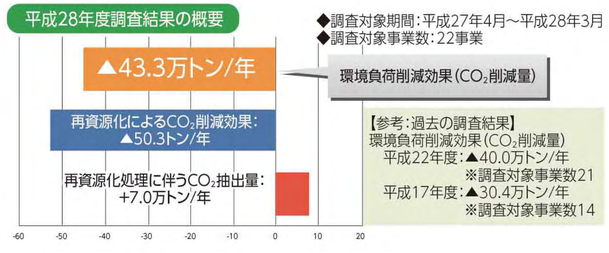
最先端の廃棄物処理やリサイクルについて実証的に研究。大学や企業が次代の環境技術を開発しています。

北九州エコタウン、政策の効果

北九州エコタウンは、平成9(1997)年の承認を受けて以降、対象エリアを市全体に広げて事業を進めており、その事業数は、我が国最大級の事業集積となっています。また、ゼロ・エミッションの実現を目指した廃棄物の再資源化により、CO2の大幅な削減にも貢献。新たな雇用創出など、経済の活性効果も上がっています。

環境負荷の削減

再資源化によって、大幅なCO2排出量削減も達成



産業振興・地域活性化

- ●事　業　数　27事業
  （各種リサイクル法に対応したもの及び独自に進出したものを合わせ、わが国最大級の事業集積）
- ●実証研究数　51研究（終了分を含む）
- ●見 学 者 数　年間約10万人・累計174万人
- ●総 投 資 額　累計833億円
  （市72億円、国等139億円、民間622億円）
- ●雇 用 者 数　1,145人

（平成31年3月末時点）

「見て」「聞いて」「感じる」循環型社会へのナビゲーター

エコタウンセンター

響灘エコフロンティアパークの基幹施設である「北九州市エコタウンセンター」。エコタウン事業を生きた教材とした環境学習の拠点となっています。また、エコタウン事業を総合的に支援するための企業支援も行われています。

さらに、ここをアジアの「グリーンショールーム」としてふさわしい省エネルギー型の施設とするため、太陽光発電はもとより、高効率照明を導入し、環境教育教材として利用するとともに、電気の使用を抑えることで、CO_2排出量の削減を図っています。

エコタウンセンターでは、エコタウン事業の取り組みや、市内の環境関連企業をパネルや展示品などで紹介。また、北九州市認定のエコ商品「エコプレミアム」製品なども展示しています。別館の「次世代エネルギーパーク」の展示コーナーではエネルギーについて、より楽しく体験しながら学べる施設となっています。

▲本館「展示ルーム」

▲ガイドによる解説

エコタウンセンター別館内

次世代エネルギーパーク展示コーナー

次世代エネルギーパーク展示コーナーでは、エネルギーについて体験しながら楽しく学べるほか、次世代エネルギーパークへの見学案内を行っています。「様々なエネルギー」や「エネルギーを巡る問題」「北九州市のエネルギーに関する取り組み」など充実した展示ルームは必見です。

エコタウンセンターでは、エコタウン内のリサイクル工場の見学コースを用意し、見学者を案内しています。工場見学では、私たちがごみとして出したものが、ここで新たな資源に生まれ変わる過程を学ぶことができます。

循環型社会の担い手 未来創造工場

北九州エコタウンでは、家電・蛍光管・自動車・OA機器・ペットボトルなど、多くのリサイクル事業が行われています。その数は、我が国最大級の事業を誇り、我が国及び世界におけるエコタウンを牽引しています。

ここでは、エコタウン内の代表的なリサイクル工場をご紹介します。

未来創造工場 1
自動車リサイクル

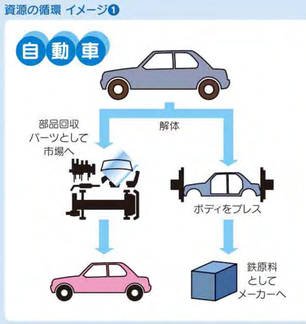
西日本オートリサイクル㈱

60mの自動車解体ラインで車から車への水平リサイクルを実現

日本初、シュレッダーレス方式での使用済み自動車のリサイクル事業者として事業を開始した西日本オートリサイクル㈱。車の生産時とは逆の流れを持つ60mもの解体ラインで1台ずつ解体することで、より精緻で的確な分別を可能にしました。シュレッダーダストを発生させない全部再資源化法で作られた使用済み自動車由来のサイコロ型鉄スクラップは、日本製鉄㈱八幡製鐵所にて鉄原料として使用され、自動車用の薄板鋼鈑等の高級鋼として生まれ変っています。

▲自動車1台分の解体パーツが並ぶ展示室。

資源の循環 イメージ❶



未来創造工場 2
ペットボトルリサイクル

西日本ペットボトルリサイクル㈱

いくつもの工程でクリアーなＰＥＴ樹脂を製造

西日本ペットボトルリサイクル㈱は、ペットボトルを大切な資源として生かすために、北九州地区の活性化を目指しています。

自治体から使用済みペットボトルを引き取り、いくつもの工程で再生処理を行い、純度の高い再生樹脂を生産しています。再生樹脂は、容器製造メーカーや繊維メーカー等へ供給され、ポリエステル繊維や食品容器の原料として利用されています。

▲ペットボトルを細かく砕きます

資源の循環 イメージ❷

未来創造工場 3
再生建材

㈱エコウッド

木とプラスチックのＤＮＡを継承　廃材から生まれる夢の建材

木の美しさとプラスチックの強さ、その両方を受け継ぐ建材。この再生建材は、廃木材と廃プラスチックを混錬し、成型して作られます。原材料はほぼ100%リサイクル素材です。原料を金型に流し込むため、いろんな形を作ることが可能。天然木の風合いを持ちながら、とげ、ささくれがなく安全で、耐久性もあるため、屋外にあるデッキ材などに利用されています。

▲最新鋭のシステムラインが生む再生建材。

資源の循環 イメージ❸

エネルギーのことは響灘地区で学ぶ

北九州次世代エネルギーパーク

海を臨む空の下でエネルギーの未来に出会う

地球温暖化や化石燃料の枯渇という問題に直面する今、CO2の削減やエネルギーの問題は地球規模の非常に深刻な課題です。

「北九州次世代エネルギーパーク」は、太陽光や風力発電など新エネルギーの必要性などについて市民の理解を深めるため、平成19(2007)年に、経済産業省から全国第1号の認定を受け、平成21(2009)年にオープンしました。

響灘地区に並ぶ複数の風力発電施設や、広大な敷地に太陽光パネルが広がるメガソーラー発電所は迫力満点です。

平成25(2013)年には、市民から建設資金を募り、売電収入の一部を利用して市民還元事業を実施する市民太陽光発電所が完成しました。ほかにも、洋上風力発電や、バイオマス・石炭混焼発電など、多種多様なエネルギーに関する取り組みが行われています。

(出典：Next Generation Energy Kitakyushu - エネルギーの未来は北九州から -)

市民太陽光発電所

北九州市が市制50周年記念事業として建設。「市民還元事業」を実施するという全国的にも例のない、公設公営のメガソーラーです。

白島国家石油備蓄基地

北九州市の響灘沖合8kmに位置し日本の石油消費量の約10日分の原油を貯蔵する世界に例の少ない洋上石油備蓄基地です。

バイオマス混焼発電所

バイオマスと石炭を粉砕し、微粉炭化したものを燃料としている、バイオマス石炭混焼の発電所です。「化石燃料の消費削減」と、「CO2の削減」に寄与しています。

大海原の新たな動力 洋上風力発電

風力発電は、発電の際に温室効果ガスを排出しない再生可能エネルギーの一つで、風さえあれば夜間でも発電でき、将来的には発電コストの低下も期待できる有望なエネルギー源です。

響灘地区では、広大な産業団地や充実した港湾インフラをいかし、風力発電をはじめとしたエネルギー関連産業の総合拠点を目指す、「グリーンエネルギーポートひびき」事業が行われています。これは、風車の部品の輸出入や保管、事前組立、沖合いの設置箇所への積み出し、設置した風車のメンテナンスに加え、主な部品の製造など、風力発電に関するあらゆる機能を響灘地区に集積するものです。

現在、沖合いの港湾区域でわが国初の大規模洋上ウィンドファーム（約220MW）の整備が進んでおり、港湾施設の整備やエネルギー関連産業の集積に取り組んでいます。

これまで、工業都市、港湾都市として発展する中で蓄積された、様々な技術やノウハウをもとに、CO2 排出を削減し、持続可能な社会づくりにむけてエネルギー分野で世界に貢献していきます。

自然・環境・文化の共存するまち
八幡東田

1900 年 伊藤博文公の視察（建設中の東田第一高炉）

日本の近代産業をリードした東田。工業地帯の発展とともに、汚れていく空と海。

明治34(1901)年、官営八幡製鐵所の操業とともに、八幡東田地区で日本の近代産業が産声を上げました。以来、東田地区は、20世紀の日本の近代産業を支え、時代の先導役を担ってきました。しかし、工業の発展と同時に、汚れていく空と海。市民は公害という大きな苦難と向き合わなくてはなりませんでした。このような中、対策を求めて立ち上がったのは、地元婦人会でした。地元婦人会の活動をはじめとした、市民・企業・行政が一体となった取り組みにより、奇跡の環境再生を果たすこととなります。

公害を克服した奇跡のまちは、環境で未来を拓くフロンティアタウンへ

深刻な公害を経験し、その克服の過程で様々な技術とノウハウを培ってきた北九州市。この経験を活かし、次に目指したのがこれからの時代にあったまちづくり。繁栄を誇った東田第一高炉はその役目を終え、広大な遊休地の再開発という新たな取り組みが始まりました。平成13(2001)年、「ジャパンエキスポ 北九州博覧祭2001」を開催。215万人の人が足を運び、全国から注目されました。その後、博覧祭の成果を活かした独創的なまちづくりの構想が生まれました。かつて公害に苦しんだこのまちは、環境で未来を拓くフロンティアタウンへ変貌をとげていきます。

自然　灰色のまちから緑のまちへ 東田大通り公園

東田地区では、低炭素型の最先端のまちづくりにあった、質の高い緑を創出することにより、景観の向上、CO2の削減や生物多様性、微気象の緩和を目指した整備が行われています。

灰色のまちと呼ばれたまちは、環境で未来を変える緑のまちへ。東田地区の中心部に位置する東田大通り公園は、木が多く植えられ、快適な空間を作るため、日陰や蒸散効果を利用しているほか、築山や木立の配置と形状により、自然な風を流す工夫がされています。

この緑あふれる公園は、休憩所や遊具が設置されるなど、大人から子どもまで様々な人の集まる憩いの空間となっています。

環境　水素社会の実現に向けて 北九州水素タウン

「水素エネルギー」は、利用段階でCO2を排出しないことに加え、再生可能エネルギーを利用することにより、CO2を出すことなく製造できる「究極のクリーンエネルギー」であることから、地球温暖化対策の切り札として注目を集めています。

北九州市水素タウン実証事業は、平成22(2010)年度から、平成26(2014)年度に、東田を舞台に展開されました。工場の協力を得て、水素ステーションから約1.2㎞のパイプラインを配管。水素を一般住宅、商業施設、公共施設へ供給し、様々な実証が行われました。

5年間の実証事業では、「水素を一般家庭や商業・公共施設のエネルギーとして本格的に利用する取り組み」「都市ガスに順じた安全基準・最新の保安技術の確立」「水素を燃料とする小型移動体(フォークリフトや自転車など)の実証」などを行いました。

この実証事業は、平成26(2014)年度にいったん終了しましたが、水素は地球温暖化対策の切り札として世界的に注目を集めていることから、これまで実証事業を実施してきた岩谷産業株式会社とともに、平成30(2018)年7月、北九州水素タウンを再始動しました。

水素を市民生活に利用する「水素社会」を実現するためには、安くて安全に水素を供給する必要があります。しかし、今はまだ、法規制やコストの面で多くの課題があります。

そこで、再始動した水素タウンでは、世界で類を見ないまちなかを走る大規模なパイプラインや一般家庭への供給設備などを活用して、課題解決に向けた実証フィールドとして、水素ビジネスに乗り出す企業に提供する取り組みを進めています。

このような水素タウンでの先進的な取り組みを国内外に広くPRしていき、ここ東田地区を水素社会の実現に向けた実証・PRの拠点として展開していきます。

※FCV2H…燃料電池自動車から家庭への電力供給

文化　過去から未来へ、北九州が誇る 産業遺産・博物館群

東田のまちの中心部は、世界遺産をはじめ、環境、自然・歴史、産業をテーマにした博物館が集結しています。そして、科学・ものづくりへの学びを通し、未来を担う人材を育む「(仮称)北九州市新科学館」も新たにオープン予定。これらの施設は、互いに連携し「知と情報の総合拠点」としての魅力を高めています。

いのちのたび博物館

北九州市環境ミュージアム

東田第一高炉

官営八幡製鐵所旧本事務所眺望スペース

北九州イノベーションギャラリー

創る・育む 新しいまち みんなの未来区 BONJONO

ゼロ・カーボンを目指す低炭素先進モデル街区

城野ゼロ・カーボン先進街区形成事業

北九州市小倉北区のJR城野駅北側に位置し、陸上自衛隊城野分屯地跡地及びUR城野団地を土地区画整理事業の手法で開発を行った地区です。

その恵まれた地区特性を活かし、暮らしに関する二酸化炭素排出量の大幅な削減と、子どもから高齢者まで多様な世代が暮らしやすく将来にわたって住み続けられる持続可能なまちづくりを目指しています。

ゼロ・カーボンの考え方

ゼロ・カーボンとは、二酸化炭素(CO_2)の排出量を理論上ゼロ、あるいはほとんどゼロにすることをいいます。

【STEP1】
様々な低炭素技術を取り入れることや、高効率機器の導入などの省エネにより、エネルギー利用を抑制することを通じて、CO_2の排出量を削減します。

【STEP2】
必要なエネルギーについては、太陽光発電などの再生可能エネルギー(創エネ)を促進し、その分のCO_2排出量を相殺することで、CO_2の実質排出量を削減します。(理論上のゼロ・カーボン)

ゼロ・カーボンを目指した4つの取り組み

BONJONOでは、ゼロ・カーボンを目指して次のような取り組みが実施されています。

省エネ・創エネを備えたエコ住宅
- ○ 全戸に太陽光発電を設置
- ○ 全戸に※HEMS(ヘムス)を設置
- ○ 長期優良住宅・低炭素認定住宅の整備
- ○ 2.5m以上の中高木を2本以上植樹

持続可能なタウンマネジメント
- ○ まちなみや地域の魅力・価値を維持・向上させるタウンマネジメントの仕組みを導入
- ○ タウンマネジメント及び地域コミュニティの取り組みを推進する一般社団法人城野ひとまちネットの立ち上げ(まちなみや緑の維持、タウンセキュリティの推進、高齢者・子育て支援 等)

公共交通の利用促進
- ○ 駅前広場、駐輪場の整備
- ○ 南北遊歩道(歩行者自転車専用道路)の整備
- ○ BONJONOと城野駅をつなぐ連絡通路の整備

環境学習・環境負荷低減に向けた取り組み
- ○ SDGsに関する取り組み
- ○ コンポストの導入に向けた取り組み
- ○ グリーンカーテンの導入に向けた取り組み
- ○ 雨水利用の導入に向けた取り組み

※HEMS:ヘムス。Home Energy Management Systemの略。
センサーやITの技術を活用して、住宅のエネルギー管理(省エネ)を行うシステムのことです。

みんなで創るまち、みんなで育むまち

「みんなの未来区 BONJONO(ボン・ジョーノ)」では、そこに住む人たちが「日々の暮らしを楽しむ」「豊かに過ごせる環境・施設・イベントを、自らの視点で提案する・形づくる・運用する」「まちを自分たちの好みに育てていく」というまちづくりを行っています。

また、住む人たちが積極的にまちづくりに参加できる仕組みづくりにも力を入れており、低炭素技術やシステムをまち全体で取り入れ、ゼロ・カーボンを目指すとともに、住む人が自らマネジメントを行い、次世代へとまちを引き継ぐ「持続可能なまちづくり」を目指しています。

くらしの製作所 TETTE

まちのほぼ中央にある、くらしの製作所TETTE(テッテ)。DIYや料理などの道具とスペースを備えたコミュニティ活動の中心となる施設です。

壁をつくらず開放的な空間デザインにすることで、いつでも気軽に立ち寄り、住民同士が交流することができるようになっています。

この施設を中心として、住民がまちづくりに参加する、様々な活動が行われています。

キッチンスペース

交流スペース

DIYスペース

まちを育むタウンマネジメントによる、参加型のまちづくり

「タウンマネジメント」とは、まちにおける良好な環境やその価値を維持・向上させるため、住民や事業者が主体的に取り組む活動です。BONJONOでは、まちを育む仕組みとして、「タウンセキュリティ」「グリーンマネジメント」「エネルギーマネジメント」の3つに取り組んでいくことで、参加型のまちづくりを進めていきます。

タウンセキュリティ
～安心・安全な、見守りのまちを育む～

BONJONOでは、主に防犯カメラでの録画やタウンマネージャーによる見回りなどを行っています。

それに加えて、住む人や事業所目線でタウンセキュリティについて考える場づくりや、市役所、自治会、学校等と連携し、「1万人の防犯パトロール」への参加や、「こども110番の家」への登録等が行われています。

グリーンマネジメント
～楽しく美しい、花と緑のまちを育む～

公園や遊歩道には、大きな並木が植えられ、歩いて楽しくなるような緑の連続する美しいまちが作られています。

また、共同菜園での野菜作りや、遊歩道花壇の花の植え替えなど、住民自らが関わり、彩りあふれたまちが育まれています。

共同菜園での野菜作り

遊歩道花壇の植え替え

エネルギーマネジメント
～エネルギーを賢く使う、持続可能なまちを育む～

コンポスト制作

全戸にHEMSを設置するなど、賢くエネルギーを使うための取り組みが行われています。

また、生ごみのコンポスト、ゼロ・カーボンの実現に向けた環境学習など、住民を主体とする省エネの取り組みを実践しています。

環境学習(SDGsカードゲーム)

タウンマネジメントで広がるコミュニティの輪

住む人が、主体的にまちづくりに取り組むことで、住む人の発案による活動や、事業者を巻き込んだ取り組みも行われています。子どもといっしょに食卓を囲む「たべTETTE」や季節のイベント等です。このような取り組みを通し、お互いに声を掛け合うことができる、そんなコミュニティの輪が広がっています。

たべTETTE

ハロウィンイベント

にぎわいを環境で創る
小倉都心部・黒崎副都心

官民あげて取り戻した清流「紫川」

小倉の中心部を流れる、北九州市のシンボル河川「紫川」。その昔は良質のアオノリの産地であり、アユも獲れ、鵜飼も行われていたと伝わっています。しかし、1960 年代には工場排水や生活排水などによって急速に汚染が進み、水質の悪化や悪臭に悩まされていました。

北九州市が発足した昭和 38（1963）年、市はまず徹底した水質調査を始め、下水道整備にも着手し、水質浄化に取り組みました。

昭和 40 年代に入ると、北九州青年会議所から「紫川の清流を取り戻そう」との声が上がったのをきっかけに、河川浄化運動が全市的な展開に。市長自らも清掃活動に参加するなど、市民と行政とが力をあわせて取り組んだ結果、水質は着実に改善されていきました。

「川が変われば、まちが変わる」～マイタウン・マイリバー整備事業～

昭和 60 年代に入ると、紫川の整備とともに、周辺の公園や道路、市街地なども一体的に整備を進める画期的なまちづくり「紫川マイタウン・マイリバー整備事業」がスタート。川幅を広げて橋を架け替えるとともに、川に背を向けていた周辺の建物も川を向いて建て替えられていきました。

また、川の自然環境とも調和した親しめる水辺空間をつくるため、自然石による緩傾斜護岸のほか、人工の滝や洲浜広場を整備。紫川の中の様子を直接観察できる「水環境館」や、川の水を冷暖房システムに利用する商業施設も誕生するなど、環境と調和した様々な取り組みが数多く生まれていきました。

黒い川と呼ばれた紫川

密集する不法建築 1979 年

1965 年

水質汚濁が進み、しだいにアユやその他の魚も姿を消してしまいました。さらに、河畔には水路を塞ぐ不法建築のバラック群が密集し、河川を取り巻く環境は劣悪そのものでした。

市民に愛される川へ

現在の紫川

カヌーを楽しむ市民

美しさを取り戻した紫川は、都心を流れる川でありながら、清流に生息されるといわれるアユやシロウオが遡上し、釣りやボート遊びもでき、自然に親しめ、市民に愛される憩いの川として再生を果たしました。

小倉都心部での環境への取り組み

平成 21（2009）年から平成 25（2013）年にかけて、「小倉都心部低炭素まちづくり推進プラン（愛称：紫川エコリバー構想）」にもとづき、紫川を中心とする小倉都心部において、市民目線での低炭素なまちづくりを推進しました。

「風の道」として ヒートアイランド現象を緩和

平成5（1993）年、建設省の「環境共生都市（エコシティ）」の指定をきっかけに、紫川の「風の道」づくりが進められました。

河口近くで川の流れが海岸線と直角に交わる場合、海風の風向きと一致し、水温の低さもあいまって、河川は都市の暑さを緩和する「風の道」としての役割を果たします。紫川でも、北側の玄界灘と南側の貫山から吹く風が通り抜けることで、都心部のヒートアイランド現象をやわらげています。

紫川に架かる「風の橋（中島橋）」は、この風をイメージしてつくられています。

川の水を活かした 省エネシステム

紫川沿いに建つ複合商業施設「リバーウォーク北九州」では、環境負荷を低減させる仕組みを積極的に取り入れています。

外気にくらべて、夏は冷たく冬は温かい川の水を活用した空調システムを導入しているほか、雨水を再利用したり、自然換気や自然採光を活かしたりすることで、エネルギーの低減を実現しています。

魚町エコルーフ

UFOかと思われるデザインの魚町エコルーフは、長さ約22m、幅約16m、高さ約8m。太陽光パネルで発電した電気をLED照明や魚町一丁目のアーケードの電源として活用するなど、省エネに優れています。南北にのびる魚町銀天街をつなぐシンボルアーケードとして、にぎわいの導線を演出しています。

あさの汐風公園

小倉駅新幹線口の海側にある、市内最大級の噴水や大芝生広場を備えた都心の癒しの場。花見・水遊び・紅葉・ウォーキングなど、四季を通じて楽しむことができます。また、太陽光や風力発電設備を整備するとともに、照明灯にはLEDを採用。低炭素のまちづくりを見て感じることのできる広場です。

黒崎副都心の環境への取り組み

黒崎副都心を訪れる人が、緑や環境に優しい取り組みを、見たり、感じたりしながらまちを散策できることを目指して、平成22（2010）年から平成25（2013）年にかけて「黒崎副都心低炭素まちづくり推進プラン」が策定されました。LED照明の導入や緑化により、CO2を年間約3,500トン削減することを見込んで、黒崎副都心のまちづくりが進められました。

黒崎駅前ペデストリアンデッキ

黒崎駅前ペデストリアンデッキは、老朽化に伴い、耐震・耐荷の長寿命化対策を実施。耐震補強に加え、舗装やLED照明を内蔵したガラス製高欄、エスカレーターなどのリニューアルが完了し、低炭素なまちづくりを推進するため、太陽光パネル、LED照明、ミストを備えたルーフの設置を行っています。

撥川

撥川では、親水性の遊歩道整備やLED照明の導入が行われています。蛎原公園や曲里の松並木、文化・交流拠点地区を結んでおり、まちと川が一体となった良好な都市環境の実現が目指されています。

遊歩道を散策すると、エコと緑を体験でき、上流部では蛍を観ることもできます。

街を支える人々の力
活 動

北九州市には、まちを支える上で大切な力があります。それは、「人」の力です。
市民・企業・行政、街に関わる全ての人々が、個々の活動を通し、北九州市の「自然・環境産業・まち」を創り、守り、発展させているのです。
また、これらの活動は、北九州市の目指す「SDGs未来都市」の理念とも合致し、「持続可能な社会」創りの一端を担っています。
ここでは、「自然・環境産業・まちづくり」を支える人々の活動をご紹介します。

北九州市 SDGs 未来都市としての取り組み

SDGs（持続可能な開発目標）とは、2015 年 9 月の国連サミットで全会一致（193 ヵ国）で採択された、2016 年から 2030 年までの国際目標です。
北九州市は、公害克服で培ってきた市民力、ものづくりの技術を活かし、「環境モデル都市」「環境未来都市」をはじめ、様々な取り組みを行ってきました。これまで、北九州市が培ってきた経験を活かし、「SDGs のトップランナー」を目指した取り組みが進められています。

日本カブトガニを守る会
福岡支部長　**高橋　俊吾　氏**

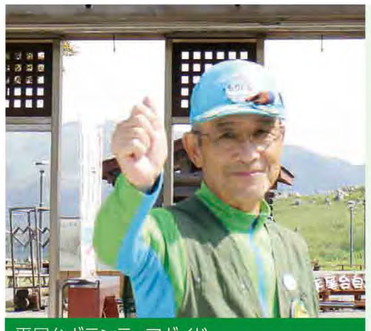
貴重な環境を次の世代へ
日本カブトガニを守る会 福岡支部

カブトガニを守る会では「カブトガニの棲む海を未来に！」を合い言葉に、保全・保護活動、調査活動、啓発活動を 3 本柱として活動しています。
保全・保護活動ではカブトガニが住む海を守るため、産卵場所である朽網川河口海岸などの漂着ごみ清掃と産卵場の整備を行っています。調査活動では、カブトガニが曽根干潟でどのくらい生息・産卵しているか現状を把握するため 20 年以上継続して調査を行っています。
見ていただきたいのは、カブトガニが産卵のため足元まで来るところです。すぐ近くで産卵を見ることができる場所は全国でもそんなにありません。
カブトガニの国内有数の生息地である曽根干潟は、日本の宝です。曽根干潟の素晴らしさを、地元の方やより多くの方々に理解してもらい、協力して、この環境を次の世代に残していきたいと考えています。

九電みらいエナジー㈱
事業企画本部　**川原　孝史　氏**

大海原の新動力の実現へ
九電みらいエナジー㈱

「ひびきウインドエナジー㈱」は、北九州市公募の「響灘洋上風力発電施設の設置・運営事業者」における事業実施予定者として、約220MWの洋上風力発電所の開発を進めており、九電みらいエナジー㈱は、ひびきウインドエナジーの出資者としてプロジェクトマネージャーの役割を担っています。現在は、風況調査や海域調査が完了し、2022年度着工に向けて設備設計中です。完成すれば、国内最大級のウインドファームになり、その壮大な風景、そして響灘の風が生み出すクリーンなエネルギーを目・肌で感じることが出来ると思います。
また、この事業は調査を含めると20年間以上と長期に及ぶため、事業に対する地元の皆さまのご理解・ご協力が不可欠です。丁寧な説明はもとより地域への貢献も同時に考えながら進めています。そしてこのようなひびきでの取り組みが、国内の大規模洋上風力のモデルとなり、全国での、洋上風力の導入に繋げていければと考えています。



平尾台ボランティアガイド
森石　伸之　氏

大自然の魅力を多くの人に
平尾台ボランティアガイド

私が、平尾台でボランティアガイドを始めたきっかけは、当時、平尾台をよく訪れており、「興味があるならガイドに参加してみては」と誘われたことでした。
現在は、主に子ども向けの専用コースを作り、約2時間をかけて、平尾台の自然を案内しています。「ジャングル体験ツアー」という、洞くつに入ったり、虫を追いかけたりするツアーが、子ども達に人気です。自分が楽しめないとお客様は楽しめないと思い、大きな声でガイドすることで、自分自身も楽しんでガイドをしています。せっかく来ていただいているので、大自然の中で冒険してほしいと思う反面、やはり安全第一に考え、案内をしています。
「なぜ石灰岩ができたのか」「なぜ平尾台に自然の洞窟ができたのか」を説明することで、お客様が納得していただくことが嬉しいです。
平尾台は、日本3大カルストにもなっている、素晴らしい場所だと思います。一人でも多くの方に、平尾台の魅力を知っていただきたいです。

住民コミュニティ部会
部会長　**坂本　佐起子　氏**

いつまでも住み続けたいまち ボン・ジョーノ
住民コミュニティ部会

ボン・ジョーノは、出来て間もない新しいまちです。住民や事業者の協働による組織「（一社）城野ひとまちネット」が中心となり、まちづくりを行っています。しかし、その大きな組織では、住民の小さな声を、まちづくりに反映させることへの困難さを抱えていました。そこで、住民の声を形にするため、「住民コミュニティ部会」が立ち上がりました。この部会を中心に、住民参加型の様々なイベントを開催しています。清掃活動、ハロウィン、もちつき等の季節行事、子ども食堂「たべTETTE」などです。「たべTETTE」は、子どもから年輩者まで地域の人が「みんなで楽しく食卓を囲む」コミュニティの場となっています。また、まちづくりを学ぶ大学生が実習として部会の運営に関わり、大学生の発案で、まちづくりに事業者を巻き込む取り組みなどが行われています。
このまちは、新しいがゆえに、まちづくりに初めて取り組む人ばかりです。だからこそ、これからの住民同士の繋がりが大切になると思います。「住む人が、住む人の手で、住み続けたいまちを創る。」私たちの活動は、まだはじまったばかりです。

北九州市エコタウンセンター
三根　康子　氏

行動変容を北九州から世界へ
北九州市エコタウンセンター

エコタウンセンターでは、「北九州エコタウン」、「次世代エネルギーパーク」の見学ガイドを行っています。施設内の展示紹介だけでなく、企業の協力でエコタウン内のリサイクル工場や風力発電等のエネルギー施設の見学案内も行っています。運ばれてきたごみが、実際に資源に生まれ変わる様子をぜひ見ていただきたいです。来ていただいた方に環境について考えるきっかけとなり、家庭や職場、学校などでごみを減らす、節電するなどの環境についての取り組みを実践してもらえるとやりがいや喜びを感じます。
エコタウンセンターを訪れるのは、小学生、企業の方、行政の方と様々ですが、海外からの視察者も多く訪れます。上皇陛下ご夫妻が視察された際に、「環境の取り組みがここ（エコタウン、北九州）から世界中に広がっていくといいですね」とおっしゃっていました。私もその通りだと感じています。一人ひとりの取り組みが環境を変える大きな力になることをたくさんの方たちに伝えていきたいです。

グリーンバード北九州市チーム
学生リーダー　**竹本　梨乃　氏**

新しい形のごみ拾いボランティア
グリーンバード北九州チーム

グリーンバードは、「きれいなまちは、人の心もきれいにする」をコンセプトに活動する、ごみ拾いボランティアです。全国にチームがあり、北九州チームは、大学生が中心となり活動しています。「ごみ拾い」というと、堅苦しいイメージもあるかもしれませんが、デザイン性の高いおそろいのユニフォームや、カラフルな軍手を使い、ごみ拾いを、「楽しく、かっこよく」、そして、誰でも気軽に参加できるよう活動しています。
私は、大学入学を機に、北九州市にやってきました。この活動を知ったのは、高校生の時。北九州市立大学に入学することが決まり、大学での活動を調べたことがきっかけでした。実際に活動に参加し分かったのは、グリーンバードが「ごみ拾い」の場に留まらず、コミュニティの場になっていることです。地域の方や、市役所、企業の方と活動することも多く、グリーンバードを通し、コミュニティがどんどん広がっていくことを実感しています。活動を通して得られた経験を大切に、今後も活動していきたいです。

活動 Activity

まち全体が学びのフィールド

北九州エコマップ

北九州市には、誇るべき「自然」、先進技術を有する「環境産業」、産業と自然が調和した「まちづくり」が市内各所に点在しています。まさに、まち全体が学びのフィールド。ここでは、本冊子でご紹介した場所の他、その関連施設についてご紹介します。

自然

❶ 曽根干潟　P4、5
❷ 平尾台　P6、7

❸ 平尾台自然の郷

平尾台の雄大な自然を満喫できる体験型公園。芝生が広がる広場ゾーンやキャンプ場、草そり場などに分かれており、一日中ゆったりと自然を満喫できます。

北九州市小倉南区平尾台1−1−1
TEL093−452−2715

❹ 平尾台自然観察センター

平尾台の雄大な自然やそこに生息する動植物について楽しく学べる施設です。平尾台の動植物・カルスト地形の仕組みなどの展示や、四季の移り変わりや自然の神秘を、ハイビジョン大画面映像で紹介しています。

北九州市小倉南区平尾台1−4−40
TEL093−453−3737

❺ 響灘ビオトープ・ネイチャーセンター　P8、9

北九州市若松区響町1丁目
TEL093−751−2023

❻ 関門海峡・門司港レトロ地区　P10

❼ 関門海峡ミュージアム

令和元(2019)年に、リニューアルした関門海峡ミュージアム。日本最大級スクリーンでの大迫力映像や、「操船シミュレーション」・「コンテナクレーンゲーム」等、関門海峡の自然や歴史を楽しく学ぶことのできる「体験型博物館」です。

北九州市門司区西海岸1−3−3
TEL093−331−6700

❽ 若松北海岸　P10
❾ 山田緑地　P11
北九州市小倉北区山田町
TEL093−582−4870
❿ 皿倉山　P11

⓫ 皿倉山ビジターセンター

登山コースや山の遊び方の情報発信をはじめ、自然を学ぶイベント・講座や、帆柱山系の自然の魅力や登山・散策コースを紹介する展示などを行っている施設です。

北九州市八幡東区大字大蔵2664−1
TEL　093−681−5539

環境産業

⓱ 北九州エコタウン響灘地区・エコタウンセンター　P12〜17

北九州市若松区向洋町10−20
TEL093−752−2881

⓲ 次世代エネルギーパーク　P18、19

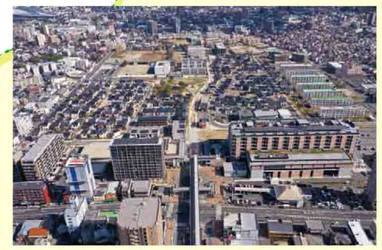
まちづくり

⓮ 小倉都心部　P24、25
⓯ 水環境館

かつてない深刻な公害に見舞われ、汚染のひどかった紫川は、市民・企業・行政の努力により、見事に蘇りました。そんな紫川の歴史や、生き物、流域の自然体系などを、楽しく学べる施設です。

北九州市小倉北区船場町1−2
TEL093−551−3011

⓭ BONJONO　P22、23



⓰ 黒崎都心部　P24、25

⓬ 八幡東田　P20、21

いのちのたび博物館　北九州市八幡東区東田2−4−1
TEL093−681−1011

北九州市環境ミュージアム
北九州市八幡東区東田2−2−6
TEL093−663−6751

北九州イノベーションギャラリー
北九州市八幡東区東田2−2−11
TEL093−663−5411

マップ Map

環境をナビゲートする　環境をコーディネートする

環境学習コンシェルジュ

　環境学習コンシェルジュは、北九州市の「環境みらい学習システム=ドコエコ!（愛称）」をサポートする専門スタッフです。
　学びたいテーマ、目的、ニーズに合わせて、北九州市で出来ることを皆様といっしょに考え、ナビゲートいたします。
　例えば、「一日で北九州の環境をみっちり学べるコースはある?」「大自然の中でリフレッシュしながら環境を学ぶ研修がしたい!」「ガイドを依頼したいけど、どこに頼めばいいのか分からない…」など、皆さんのご相談にお応えします。
　また、ドコエコ!ホームページでは、環境学習の出来る施設や、イベント情報等を発信しているほか、環境学習コンシェルジュ企画のエコツアー、「ドコエコ!ツアー」を開催しています。

環境学習コンシェルジュによる
「ドコエコ!ツアー」

ドコエコ! ホームページ

環境学習の情報がもりだくさん

環境学習施設をはじめ、体験プログラム、イベント情報、環境学習情報誌やこのエコツアーガイドブックなど、充実の内容♪週末のお出かけにも大活躍!レッツクリック!

ドコエコ　を検索！

環境学習コンシェルジュのお問い合わせ

施設紹介、エコツアーの企画、社会見学、自由研究など、環境学習のことなら何でもお気軽にご相談を!
ステキな環境学習になるようお手伝いします♪

TEL　093-663-6755（環境ミュージアム内）

E-MAIL docoeco@eco-museum.com

ホームページやFacebook、Twitterで情報を配信しています。

発行　**北九州市 環境局 総務政策部 環境学習課**
TEL 093-582-2784　FAX 093-582-2196
〒803-8501　北九州市小倉北区城内1-1

北九州市の情報はホームページでご覧いただけます。
アドレス　https://www.city.kitakyushu.lg.jp